

エレミヤ書 17章5-10節

コリントの信徒への手紙一 15章12-20節

ルカによる福音書 6章17-26節

昨年より聖書日課は、新しい祈禱書の試用版を用いていますが、本日の日課に変化はありません。ただし、詩編の訳は新しいものですので、若干違いがあります。1節、前の訳では「**幸せな人、それは神に逆らう者の謀りごとに歩まず**」でしたが、「**幸いな者、悪しき者の謀に歩まず**」となりました。これは、旧約において、「悪い」に相当する言葉を、新共同訳聖書が「神に逆らう」と訳し、前の祈禱書がそれに順じたのでしょう。逆に、聖書協会共同訳は、以前の口語訳と同じように、そのまま「悪」と訳しています。それゆえ「神に逆らう者」が「悪しき者」に戻ったのでしょう。文語祈禱書の詩編でも、この箇所は「悪しき者」となっていました。それでは、新共同訳において、「悪い」を「神に逆らう」と訳したのは「悪い」のかというところでもありません。主なる神様の意思に逆らうことが「悪」であることには間違いがないからです。ことに詩編はそのような視点を持っているからです。

基本的に『聖書』において善悪の基準は、主なる神様にあります。しかし、人間は、その時の判断で、最善の判断をします。あるいは宗教・文化や信条を超えて正しいことが良いと思ったりします。また、法律がなければ、善悪の判断が下せないという場合もあります。そのような中で、何が悪かをはっきりさせるために、あえて「悪」を「神に逆らう」と意味づけることは決して間違いではないのです。

ただし、翻訳として問題となるのは、この「悪い」に相当する言葉は、一般的な「悪」にも用いられる言葉だということです。それゆえ、過度な意味の決めつけはあまり良くないという見方があるからです。「悪い」と「神に逆らう」とそれだけを取り出すと、かなり違いが浮き上がってしまいますが、善悪について、主なる神様が関わることは、『聖書』の大切なポイントです。

さて、本日の福音書は、「イエスは彼らと一緒に山から下りて、平地にお立ちになった～イエスは目を上げ、弟子たちを見て言われた」（ルカ 6:17～20）とある通り場面は平地です。それゆえ「平地の説教」とも呼ばれる箇所です（あまりその名は有名ではありませんが）。これは並行箇所のマタイ（5:1-12）が「山上の説教」として有名なことと呼応しています。マタイとルカ、どちらがイエス様のオリジナルの言葉に近いのか、一般的な歴史的判断では、短い文言の方がオリジナルに近いと考えます。説教全体を考えても、マタイの山上の説教は、5章から7章まで続きますが、ルカの平地の説教は、6章のみです。その意味では、オリジナルに近いのは、本日のルカの方だといえますが、教会では、マタイの「山上の説教」という名称や内容の方がはるかに有名です。

ルカとマタイを比較した場合の違いは、ことに本日の箇所は、その長さだけではありません。マタイが、その箇所（マタイ 6:3-12）で「幸いである」という人たちのみに語っているのに対して、ルカは、「幸いである」という人たちだけではなく（ルカ 6:20-23）、逆に「災いあれ」と呼ばれる人たちについても触れています（ルカ 6:24-26）。ルカは、人間のどういう判断とどういう行動が、「幸い」であるか、「災い」であるか、言い換えれば、「善」であり「悪」であるか、それを一括して比較して語っているのです。マタイの場合はそうではありません。マタイにおいて「災

いあれ」という表現は、いくつかの箇所にあります（マタイ 11:21、18:7）、もっとも集中的に用いられている箇所は、マタイ 23章 13節から 16節にある、「律法学者とファリサイ派」の人たちに対する批判にある「災いあれ」です。ここは明らかに「山上の説教」の箇所の対比となっているのですが、箇所が離れていることもあり、あまり有名ではありません（今日的には、ユダヤ教の皆さまとの関係を考えると、有名になっても困ってしまうところもあります）。マタイにおいて、幸いであるのは、イエス様が、「山上の説教」を通して明確にしてくださったことです。言い換えれば、『聖書（旧約）』を通して主なる神様が示すことがら、ことに律法、それを、イエス様の愛を通して実行することが大切「善」であり、「幸い」なのです。それゆえに、イエス様の愛を否定して律法を実行しようとしている人々への批判が強いのです。これは『聖書（新約）』の言葉ではありますが、明らかにマタイ福音書が成立した時代背景が関わっていると思います。

それでは、本日の福音書のルカの場合は同でしょうか。マタイほどの強い時代背景の影響はないと思われます。むしろ、一般的な善悪の判断を前提とした、社会倫理、社会正義に近い価値判断がそこあるといえます。また、そう解釈されるがゆえに、教会でも社会的な事柄に関心の強い方々は、マタイの山上の説教ではなく、ルカの方の平地の説教を好む傾向にあります。さらに強い人はマルコに注目しますが、それは別のお話です。

単純な視点で、ルカとマタイを比較しましたが、「**貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。今飢えている人々は、幸いである、あなたがたは満たされる。今泣いている人々は、幸いである、あなたがたは笑うようになる**」、ルカのこの部分だけとっても、このようなことが言えるのは、イエス様であるからです。貧しい人に対して、神の国があなたがたのものであることを宣言し、飢えている人が満たされること、泣いている人は笑うようになること、それらを未来に必ず起こることとして語るができるのはイエス様であるからです。それゆえに、イエス様を信じる教会、イエス様の体である教会が、同じように愛と具体性をもって、この言葉を宣言することが大切です。残念ながら、二千年の時を経ても、そのようなことは実現していません。それゆえに、教会では実現できないことがらであっても、社会で実現することが大切である、社会の課題とかかわるからこそ、実現できるという考えもありますが、マタイはそうではありません。まず教会で実現されなければならないことを強調しています。それは、おそらくルカも同じであったでしょう。教会は、イエス様を通して神様を信じているが、その教会でイエス様の教えは具体化できないが、ローマ帝国の中でイエス様を信じない人々と協力し合うからこそ、イエス様の教えが具体化できる、そのような意味で、平地の説教として記したのではないと思います。

『聖書』の内容は、基本的に主なる神様への信仰がなければ、理解できないところが多くあります。それゆえに、新共同訳・祈祷書の詩編が、「悪」を「神に逆らう」としたのは正しいと思います。しかし、それでも『聖書』にはそれ自体で響く言葉があります。まずわたしたち自身が、その言葉を通して養われ導かれることが大切です。もうすぐ大斎節に入りますが、今年も、「み言葉と歩む大斎節」が発行されます。日々、『聖書』に親しむことは、キリスト者として大切です。大斎節にこのような導きがあることは恵みです。わたしたち自身が、み言葉から学ぶことを通して、神の言葉を響かせる教会でありたいと思います。